「竹語り」　　２０１０年6月１９日　　於円東寺（流山市）

わたしの竹修行

竹にまつわる話

ひとつのくくりで話を始めようと思う。

わたしは、これまでにあちこちと歩いたきたのだが、その目的ははっきりしない。はっきりしないのは当然で、目的を持たないことを願っていたからである。目的が歩く前に用意されていれば、その目的にそった歩き方しかできない。これは、欲深いわたしにとってはたいへんな損失である。自らを全ての制約から解き放してこそ、できることなら、野放しにしてこそ、自由にモノを見ることができるからである。モノを見たいから歩くのだった。

そんな歩き方をしていたら、いくら時間があってもたらないし、何度お巡りさんに捕まってもしかたがない。収入にも結びつかない。だから、わたしの歩き方は、ひとさまに押しつけるものではなくて、あくまでもわたし個人の試行錯誤の経過報告である。それをどのように応用しようと、どのように廃棄しようと、受け取る側の勝手である。

そんなとりとめのない歩き方なのだが、歩く姿勢は一貫していた。腰を少し曲げ、目線をやや下向き加減にする。拾いモノをするときの姿勢に近い。ときたま、上目を使って世間をうかがう。こそ泥と少しも変わらない。が、うしろめたさは微塵も感じてはいない。だから、貧相を演じているわけではない。要は、晒し者になる工夫を凝らしている最中なのである。

晒すという行為は、露出狂のなせるものではない。ひと味違った欲の掻き方なのでる。つまり、地べたに近いほど、モノを観る特等席である、とはポンがの賜ったコトバだが、わたしも、そのコトバを信奉しているひとりである。高みから見下ろしたのでは、誰も話しかけてはこない。ただ、ありがたい高貴なお方に近寄らないことを心得ている下々は口を閉ざすばかりである。

後ろ指をさされることを恐れてはならない。ひとさまの笑いものになることを恐れてはならない。それは、決して気楽な稼業ではないのだが、その後に待っているのは、えも言われぬ快感である。「しかたない、教えてやるか」と、相手が切りだしてくればしめたものである。身を低くすることは、卑屈になることではなく、視線を同じにするという意味である。そこには価値観を共有する同胞からの宝モノの贈り物が待っている。

庭先仕事がそうである。大元はカゴやのみならず、職人の修行の一環として行われてきた。農家の庭先を借りて、その家のリクエストに応じて仕事をするのである。布団綿の打ち直しをして歩く職人が以前にはいたが、こうした歩きを「西行する」という。「西行」して歩く職には他にもいる。研ぎ師、鋳掛けや、ロクロ師などなど。

カゴやは裏山から竹を伐りだして、当家の注文をこなす。注文が多い場合には何日もかかる。そうした場合がほとんどでるが、カゴやは寝食を提供してもらい、さらに日当を貰う。カゴ代を貰うわけではない。わたしの師匠は明治四十年かその一年後の生まれだったと思うが、熊本県の球磨盆地の中で生きてきた人である。五人の子どもを育てるのに、昭和二十年代には、峠を越えて、山の向こうの椎葉村に庭先仕事に出かけていった。もっとも長期に滞在した家は

十一日間だったと、わたしに語ってくれた。山深い里であるから、隣りの農家に移るのに、ワラジを二足潰したこともあったそうだ。

現金が限られていた時代だから、日当が米や大豆であった。師匠はそうした品々を別の所で換金しては子育て費用に充てていた。

わたしが庭先仕事をする目的は師匠とは違う。収入を得ることには違いないが、そうした歩き方をしなくても、カゴ屋が成り立つ時代になっている。販売してくれる店屋も多い。市場は都市部にも拡がっている。米上げざるに代わって、街中で持ち歩ける買い物カゴを作ることになるわけである。

それでも農家の庭先にムシロを広げて座りたくなるのは何故か？　自分が安心していられるからである。理屈の支配を受けない世界がそこにある。羊水に浸かっているような安心感、原初の世界に遊んでいる心地よさがあるからだった。口うるさい村社会のただ中へ突入するのではなく、周縁から村を観る位置を確保しているのだから、これまた特等席である。無責任でいられるのが心地よいのではなく、周縁にいるからこそ見えてくるものがあるのである。

そうした庭先を提供してくれる家も減っている。これは哀しいことではない。だれもが生活の向上を夢みて、都市部へ働きにでるのは人間の生理にかなっている。問題は、そうした物質生活の向上を必ずしも第一義には頭に置いていない人びとを無視したところに、今日の日本の暮らしの主眼が置かれていることである。縄文時代であろうと、現代であろうと、体制にまつろわぬ趣向を抑えつけたところに文明が成り立っている。

この続きは当日の「竹語り」の方にゆずることにしよう。